吉弘楽（よしひろがく）

国指定重要無形民俗文化財

国東の文化財

吉弘楽の演目（ツグリ）

※1～14までの演目を演じることを「一庭（ひとにわ）」といいます。
一庭を演じるのに約１時間かかります。

1	神納（しんのう）	心身を清め薬師如来のいる東方に礼拝して楽打ちを告げます。
2	ガタガタ	ゆるやかな動きで楽庭に魔物が侵入しないよう結界を作ります。
3	ツクテンツク	軽快なリズムでこれから楽打ちをするぞと天を衝くほどの意気込みを表します。
4	道楽庭入り	楽人たちが東を向いて右回りに楽庭に入っていきます。これから祈願の楽打ちが始まります。
5	四方固（しほうがため）	四天王をはじめ諸仏を招くため、末頭の音頭が楽庭の東西南北を清めます。続いて中頭と本頭の音頭と鉦が庭に入り、定位置につきます。
6	テンゴーゲー（天仰迎）	天の諸仏を楽庭に迎えます。この時太鼓の左バチで天を指します（捧げバチ：ささげばち）。
7	念仏	念仏申しが中央に進み、２名ずつ向かい合い「南無阿弥陀仏」の名号（みょうごう）を独特の節で唱えます。
8	テンゴーゲー	念仏が終わり、諸仏を天へ送ります。
9	シドロ	祈りの気持ちを体全体で表すかのような、動きの激しい、吉弘楽の中心的な演目です。
10	チーゴーゲー（地仰迎）	地の諸仏を楽庭に迎えます。右バチや撞木（しゅもく）を地を這うように下げ、足で地面を蹴る動作をします。これは稲の根元に寄生する害虫を払う「虫追い（むしおい）」を表しています。
11	テンダラマンダラ	「トーヲテンダラマンダラゴーショーデー」と口の中で唱えながら楽打ちします。「マンダラ」は「曼荼羅」だと考えられており、名号（みょうごう：仏や菩薩の称号）として唱えるとされています。
12	チーゴーゲー	祈祷（きとう）が終わり、諸仏を地へ送ります。
13	ツクマン	すべての修法、祈祷を満たし尽くしたことを表します。
14	トーテン（登天）	四方固（しほうがため）で招いた四天王はじめ諸仏が天に帰っていきます。

案内図

お問い合わせ

国東市伝統文化活性化実行委員会

事務局：国東市教育委員会　文化財課

〒873-0504 大分県国東市国東町安国寺 1639-2
国東市歴史体験学習館内
TEL：0978-72-2677
FAX：0978-72-2505

吉弘楽（よしひろがく）の由来

吉弘楽は、大分県国東市武蔵町吉広字美婦（みふ）に鎮座する楽庭（がくにわ）八幡神社境内で奉納される楽打ちです。

楽打ちとは、太鼓を打ち鳴らしながら踊る「太鼓踊り」で、念仏踊り（ねんぶつおどり）の系譜を引く芸能です。念仏踊りは本来死者の供養のためのものですが、死者の怨霊（おんりょう）が災厄（さいやく）をもたらすという考えから、怨霊を鎮めて災厄を免れようとする芸能になったと考えられています。吉弘楽はショウガ（唱え文句）や念仏に合わせて踊りますが、この念仏には鎌倉時代の踊り念仏を彷彿とさせる詞章があるといわれています。

伝承では、南北朝時代に豊後国の守護であった大友（おおとも）氏の家臣、吉弘正賢（よしひろまさたか）がこの地域の領主となり、戦勝や五穀豊穣を祈願して始めたと伝えられています。吉弘楽の衣装は農民が用いる腰蓑（こしみの）を着けているのが特徴です。これは虫追い行事からの伝統と言われています。腰蓑を取れば兜（かぶと）や陣笠（じんかさ）をかぶり旗指物（はたさしもの）をつけた武士の姿となります。これは戦場の吉弘軍を再現したものとも考えられています。

（参考／段上達雄　別府大学教授の論考による）

衰退と復興

慶長五年（一六〇〇年）に起きた徳川家康（東軍）と石田三成（西軍）の争いは全国に広がり、豊後国でも西軍についた大友義統（おおともよしむね）と東軍についた黒田如水（くろだじょすい）が対峙しました。大友軍で活躍した吉弘統幸（よしひろむねゆき）は現在の別府市に当たる別府石垣原（いしがきばる）の合戦で戦死し、大友軍は敗北します。これ以降、吉広村での楽打ちは衰退しました。

その後、吉広村では幾度も災害に見舞われ、特に江戸時代の元禄年間（一六八八～一七〇四年）には農作物の虫害が数年続き、他の地域よりもひどい被害を受けたと伝えられています。時の領主であった杵築藩が調査に乗り出し、吉弘楽の中断を知り、楽打ちを復興するよう村の庄屋の高原徳左衛門（たかはらとくざえもん）に命じました。徳左衛門たちはまだ吉弘楽が行われていた都甲（豊後高田市都甲地区）の松行村から師を招いて吉弘楽を伝習し、およそ一〇〇年ぶりに復興しました。

各地で行われていた楽打ちも多くは途絶える中、吉弘楽は吉広地区を中心に保存会を結成し、地域をあげて今日まで継承してきました。平成八年には国の重要無形民俗文化財に指定されています。吉弘楽は旧暦の六月十三日に開催していましたが、現在は七月の第四日曜日に行われ、午前十時と午後二時の二回演じられます。

吉弘楽の特徴

吉弘楽には独特の用語があります。例えば楽を行うことを「打つ」、笛を吹くことを「クサリ」といい、太鼓のことを「ドロ」と呼びます。また演目のことを「ツグリ」といい、ツグリの1番から14番全てを打つことを「一庭（ひとにわ）」、2回打てば「二庭（ふたにわ）」、7番から14番まで半分打つことを「半庭（はんにわ）」といいます。

楽を打つ際、楽人は「ショウガ」と呼ばれる言葉を唱えます。ショウガには「ツークーテーン」や「テーンガ　ターガ　ターヤー　ガーター　ガーターヤー」など独特の節があり、この節に合わせて動作します。そのため吉弘楽の基本はショウガにあるといわれます。また同じショウガでも役や組によって動作が異なり複雑です。

楽員（楽人）の構成

楽打ちは総勢49名の楽員（楽人（がくと））で構成され、楽員は「本頭（ほんがしら）」、「中頭（なかど）」、「末頭（すえ）」の3組に大きく編成されます。本頭と末頭はそれぞれ23名ずつでその内訳は音頭（おんど）1名、鉦（かね）2名、笛（ふえ）3名、念仏申し（ねんぶつもうし）2名、端楽（はしがく）15名です。中頭は音頭1名、鉦2名の3名で構成されます。

本頭（ほんがしら）の音頭（おんど）

中頭（なかど）の音頭（おんど）

末頭（すえ）の音頭（おんど）

「音頭（おんど）」
音頭は各組の指導者役で、一番動きのはげしい役です。頭に鉢巻を締め、その上に本頭は立烏帽子（たてえぼし）、中頭は鍬形の立物をつけた兜、末頭は三日月の立物つけた兜をかぶります。元禄袖（げんろくそで）の着物にたすきをかけ、腰蓑（こしみの）をまとい、腕には手甲（てこう）、脚には脚絆（きゃはん）をつけ、草鞋（わらじ）をはきます。胸に吉弘氏の紋章である三つ巴紋（みつどもえもん）の描かれた締め太鼓をつけ、背中に旗指物（はたさしもの）を背負い、両手にバチを持ちます。鉢巻・たすき・締め太鼓のひも・旗指物はそれぞれ本頭は紺（こん）、中頭は白、末頭は赤に色分けされています。

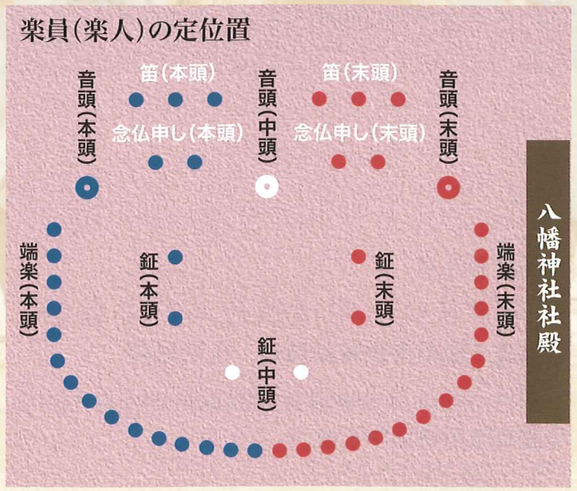
「鉦（かね）」
鉦は頭に烏兜（とりかぶと）をかぶり、裃（かみしも）を着て脚に脚絆を巻きます。左手に鉦を持ち右手に撞木（しゅもく）を構えます。

「笛（ふえ）」
笛は頭に烏帽子（えぼし）をかぶり、裃（かみしも）を着て黒漆（くろうるし）を塗った笛を持ちます。

「念仏申し（ねんぶつもうし）」
念仏申しは裃（かみしも）を着て右手に扇子を持ち、腰に脇差（わきざし）を差します。

本頭（ほんがしら）の端楽（はしがく）

末頭（すえ）の端楽（はしがく）

「端楽（はしがく）」
端楽は頭に鉢巻を締め、その上に本頭は黒、末頭は赤の陣笠（じんがさ）をかぶります。服装は音頭と同じく元禄袖の着物にたすきがけし、腰蓑（こしみの）、手甲、脚絆をつけ草鞋をはきます。胸に締め太鼓をつけ、背中に旗指物を背負い、両手にバチを持ちます。鉢巻・たすき・締め太鼓のひも・旗指物も音頭と同じように各組で色分けされています。

楽員（楽人）の定位置